

東邦大学学術リポジトリ

Toho University Academic Repository

タイトル	不確かな時代に今問われる、確かな看護とは：第38回 日本看護科学学会 学術集会に参加して
別タイトル	What is reliable nursing in uncertain times? ~ Report of the 38nd Conference of Japan Academy of Nursing Science. ~
作成者（著者）	瀧口, 千枝
公開者	FD 委員会 研究推進検討会 (東邦大学健康科学部)
発行日	2019.12.01
ISSN	24343838
掲載情報	東邦大学健康科学ジャーナル. 2. p.29 30.
資料種別	学術雑誌論文
内容記述	学会レポート
著者版フラグ	publisher
メタデータのURL	https://mylibrary.toho u.ac.jp/webopac/TD56889661

不確かな時代に今問われる、確かな看護とは

—第38回 日本看護科学学会学術集会に参加して—

瀧口 千枝

I. はじめに

「不確かな時代に今問われる、確かな看護とは—看護におけるサイエンスを考える」、これは第38回日本看護科学学会学術集会のスローガンでした。“確かな看護”って何だろう、看護教育者・研究者として走り始めた自分は何をすべきだろう、そんな大きな疑問へのヒントが見つかるのではないかという期待に胸を躍らせて、四国松山に行ってまいりました。

II. 印象に残った講演と学び

1. 臨床判断の育成で目指す“確かな看護”

私のバックグラウンドはクリティカルケアなので、領域に特化した学会に参加することが多いのですが、この学会は領域を超えて研究成果の共有や意見交換が出来るところが魅力的です。

看護教育関連の講演では、様々な領域から、シミュレーション教育の実施や評価が報告されていました。中でも印象に残ったのは、看護学生への終末期ケアのシミュレーション教育の報告でした。教育後に、身体的ケア技術のみならず心理的ケア技術が向上したことが示唆されていました。看護実践力の中核は、目の前の患者さんの状況を的確に受け止めて、そこから問題をつかみ出してくる思考プロセス、患者さんの状況やリソースに応じて柔軟に対処できる行動力であると感じます。シミュレーショントレーニングが看護実践力の育成に有用であるとの報告から考えることが出来ます。

さらに興味深いのは、シミュレーション後、学生のレジリエンスの向上が示唆されたという点でした。レジリエンスは、ストレス状況下において、一時的には傷つきながらもそこから立ち直っていく力という点で共通認識されている概念です。私は臨床経験の中で、入職してきた新人看護師が

失敗を成長の材料に転換することに困難を感じている場面を多く見ました。こういう時、臨床では個人のパーソナリティに原因を求めて効果的に対応されないことが少なくありません。しかし、この報告を聞いて、シミュレーション教育に、看護師のストレス耐性を向上できる可能性を感じ、救われた気がしました。

技術演習ではこのような点も意識して授業計画を立案することが、大学教育の目指す社会人基礎力の育成にも繋がるのかも知れないと感じました。

2. 領域間連携でめざす“確かな看護”

交流集会では、高齢患者の開心手術後の回復促進をテーマにしているものに参加しました。回復促進の鍵として「フレイル」予防に焦点が当てられていました。術前からのフレイルアセスメントに基づいて、医師・看護師だけでなく、理学療法士、言語療法士、栄養士、臨床心理士等が連携する介入モデルが提案されていました。

周術期管理技術の革新も手伝い、高侵襲手術が高齢者へ適応され、本邦における集中治療室入室患者の年齢の中央値は70歳とも報告されています。侵襲を乗り越え、その人らしい日常生活に戻っていただくために、クリティカルケアは高齢者看護や在宅看護と離して考えることは出来ない状況になってきています。専門職種間、領域間で連携して教育・研究していくことが必須なのです。まさにこの事実こそ、本学科の特徴であるトランスレーショナル教育がいかに時代のニーズを捉えたものであるかを証明していると感じました。

2019年度は開学3年目、本格的な臨床看護学各論、領域別実習が始まります。領域間の相談・連携を密にし、それぞれの科目の相乗効果を狙えるような授業計展開をする責務に身の引き締まる思いです。

Ⅲ. 自身の研究の発展に向けた学び

ライフワークである集中治療患者の回復促進に向けた看護師のケアコーディネーションについてポスター発表させていただきました。発表の時間には、思っていたよりも多く、また他領域の臨床家や教員の方が足を止めてくださいました。在宅看護やがん看護を専門としている研究者と、ケアコーディネーションの共通点やコラボレーションの可能性についてディスカッションするなど、今後の研究の発展に向けた多くの収穫がありました。

また今回工夫したのは、ハンドアウトを作成したことです。発表時に配布した他、発表時間以外には「ご自由にお持ちください」の掲示とともに会場内に設置したところ、準備した枚数のほとんどがなくなりました。事前にハンドアウトを見て、具体的な意見を持って発表時間に来てくださった方もおり、嬉しかったです。より多くの方に興味を持っていただけるような発表の工夫やアピールについて、さらに考えていきたいと思いました。

Ⅳ. その他のミッション

今回の松山行きでは、学会での学び以外のミッションもありました。一つは愛媛の家庭では蛇口からみかんジュースが出るというのは本当か確かめること、もう一つは、本場愛媛名物の鯛めしを味わうことでした。空港でみかんジュースタワーの模型(写真1)を見つけ、さらに学会会場に併設されたジュースマシーン(写真2)をみた私は興奮ぎみに会場スタッフの方に「本当だったんですね!」と尋ねました。残念ながら、このような蛇口はイベント用であり、家庭の蛇口からジュースがでるといのは都

市伝説だそうです。

学会一日目の夜に鯛めし(写真3)をいただきました。愛媛の鯛は、みかんジュースを絞った後に残る皮を飼料



写真3. 本場愛媛の鯛めし

にして養殖しており臭みが少ないとお寿司屋さんのマスターにうかがいました。

醤油ベースのだし汁に卵と鯛のお刺身混ぜ、熱々のご飯にかけていただく鯛めしは絶品でした。こんな風に、その土地の文化に触れることが出来るのも、学会参加の魅力だと感じました。

終わりに

“確かな看護”は、その人が望む日常に戻るために、今、ここですべき支援を見極められる臨床判断能力、その支援の実現に向けて必要な領域と適切に連携する能力に支えられていると再認識しました。まさに自身の研究テーマでもあり、今回の学びを活かし、心新たに研究・教育に邁進していこうと思います。



写真1.
空港で出迎えてくれた
みかんジュースタワー



写真2.
学会会場に併設された
みかんジュースマシーン